



「酒米の郷」になって未来を拓く(秋田市鶴養)

「酒米を無農薬で」と、酒造会社《新政》から鶴養の人たちに提案があった。無農薬と言われて、「理想と現実の違い、無理だ!!」と発言する人が大半を占めた。先日、NHK教育テレビで「たんぼ物語」というドキュメンタリーが放送され、興味深く視聴したが、集落の未来を選択する過程を、ロンドンに住む女性ディレクターが、四年にわたって記録していたのだ。

鶴養は岩見三内地区の東側の端にあり、これより先に人家は無く、清流が集落内を勢い良く流れる山里だ。

秋田市の中心部から車で四十五分くらいの所にあり、両中門づくりの茅葺民家も見える鶴養に、

四十年ほど前から通っていた。庄屋であった佐藤家の、樹齢が三百年というモミの木に長い歴史を感じるが、ディレクターが取材を始めた頃は、人口が百三十五人、平均年齢は六十九歳と高齢化した状態で、未来は閉ざされていた。

新政の「ページを戻す」という社長の方針は、昔から伝わる酒米を昔ながらの木桶で醸すことにあった。杜氏の古関さんを鶴養に居住させ、「美郷錦」と陸羽百三十二号「愛亀」の無農薬、無肥料での育成を任せただ。そして、収穫した「愛亀」で新酒を仕込み、二か月後のお披露目会で「うめえー!!」と褒められてから、人の繋がりはドラマのように展開していった。

古関さんが「住んでいて良かった」と認識するのは、借りていた鶴養の住宅が火災で焼け落ちてからであった。一軒ずつ謝罪で訪ねて、「老老介護」の実態が見えてきたという。公民館で謝罪したとき、「新政がいなくなると、鶴養はダメになる」という声が多くあり、今年は二十四町歩全てのたんぼで、無農薬の酒米を育てることになったのだ。

「酒米の郷」づくりは、本格的になっていく。鶴養に酒蔵を設け、秋田杉の木樽をつくる工房も建てるというのだ。「俺で終わると決めていたが、もう少し続くのかな」と話す住人の言葉に、未来を展望する気持ちと嬉しさが込められていた。